藤沢市総合教育会議　議事録

会議名	令和３年度第１回　総合教育会議
開催日	2021 年（令和３年）８月 20 日（金）14:00～15:40
場　所	本庁舎６階　会議室６－１
出席者	（市側）鈴木市長 （教育委員会）岩本教育長、大津委員、木原委員、飯盛委員 （講師）竹原和泉氏 （関係職員）教育部長、教育部参事、教育総務課長、同課主幹、同課課長補佐、同課主査

【議事録】

事務局（司会）

・ただいまから「令和３年度第１回総合教育会議」を開催いたします。

・会議を開会する前に、ご来場の皆様にお願いがございます。携帯電話は電源をお切りになるか、マナーモードに設定をお願いいたします。

・次に、本日の傍聴者の皆様で録音、録画、写真撮影を行う方はいらっしゃいましたら、挙手をお願いいたします。（なし）

・なお、会議の記録のために事務局で録音と写真撮影をさせていただきますので、ご了承ください。写真撮影は、傍聴の方のお顔は写らないように配慮いたしますので、ご了解いただきたいと思います。

・続いて、総合教育会議開催に当たり、本会議の目的について、改めて確認をさせていただきます。この会議の目的は、市長と教育委員会が十分な意思疎通を図り、藤沢市の教育の課題やあるべき姿を共有し、次代を担うすべての子どもたちを市全体で見守り、育む取組を共有する場でございます。

・コロナ禍ではありますが、子どもたちの日常生活や学びの継続など、本事業の重要性に鑑み、あえて開催をさせていただきました。こうした状況の中で、本日のテーマは、「学校運営協議会（コミュニティ・スクール）について」を予定しております。

・コミュニティ・スクールについては、市といたしましても、子どもたちのために何をすべきかを考え、実践する重要な事業と位置づけております。

・それでは、開会に当たりまして、総合教育会議の座長であります鈴木市長に一言ご挨拶をお願いいたします。

鈴木市長

・皆さん、こんにちは。本日は、ご多忙の中、お集まりいただき、誠にありがとうございます。感染防止ということで、このような形での会議となっております。藤沢市では昨日の新規感染者が 114 名と、過去最高になってしまいました。傾向としては、主に若年層の方が多く、また、現在、開いている保育園等でも感染者が目立つところでございますので、早く、日常生活に戻るように、皆さんと努力して頑張っていければと思っているところでございます。

・さて、先日、東京 2020 大会が行われました。藤沢もセーリング競技の会場として、一翼を担ってきたわけでございますが、その中で、オリンピックで活躍された選手もかなり輩出しております。例えばソフトボールチームでは、主将の山田恵里選手が金メダル、サーフィンでは都筑有夢路選手が銅メダル、また、セーリング競技でも吉田・吉岡組が 7 位に入賞するなど、大変な活躍をしてくれたところでもございます。また、無観客ということでボランティアの皆様もできることが少なくなってしまったわけですが、それでも自主的に出て、いろいろ奉仕活動あるいは選手に対して激励していただくなどの活動をしていらっしゃいました。

・また、パラリンピックの方でも藤沢は直接会場市ではないですけれども、現在、ポルトガルのパラリンピックチームが県立スポーツセンターで事前キャンプを行っており、特に団長の方は、医師でございまして、感染症に配慮して、「うちからは絶対に出さない」といった決意でキャンプが行われておりますので、テレビ等で見たら応援していただけたらと思います。また、藤沢からはボッチャで市の職員が選手として出ますので、是非、応援をしていただきたいと思います。そしてオリンピック・パラリンピックを見て、いろいろなドラマが起こりますので、子どもたちも感動や心に残るところがあるのではないかと思っております。また、ボランティアの皆さんも直接の活動は少なかったにせよ、今まで 2 年、3 年と研修や講座等で培ってきたものがあられて、市の活性化のためになるのではないかと思っておりますので、よろしくお願いしたいと思います。

・本日は、「コミュニティ・スクールについて」ということで、まちと学校のみらい代表理事として、また、ＣＳマイスターの竹原和泉先生にご講演をいただき、その後、皆さんからご意見をいただきまして、コミュニティ・スクールをなお一層良いものにするために、お互いに理解を深めていくためにも有意義なことであると思いますので、よろしくお願いしたいと思います。

事務局（司会）

・ありがとうございました。
・それでは、本日、ご出席の教育長及び教育委員会委員の皆様から自己紹介をお願いいたします。（委員等自己紹介）
・それでは、本日の資料の確認をさせていただきます。（資料確認）
・ここからは座長であります鈴木市長に進行をお願いします。

鈴木市長

・まず、「議事録署名人」を決定したいと思います。事務局の説明をお願いします。

事務局

・今回は、鈴木市長と岩本教育長にお願いしたいと思います。

鈴木市長

・議事録署名人については、私と岩本教育長ということで、よろしくお願いしたいと思います。

鈴木市長

・それでは、議事の（１）に入ります。事務局の説明をお願いします。

事務局

・本市における学校運営協議会につきましては、今年度から秋葉台小学校と片瀬小学校の２校に設置し、モデル校としての運用を開始したところです。今後の運用に当たり、本日は、文部科学省のコミュニティ・スクール推進員（ＣＳマイスター）の竹原様より、先進的な取組や事例などを踏まえたお話やご助言などをいただきまして、その後、質疑や皆様との意見交換を実施してまいりたいと考えておりますので、よろしくお願いします。
・それでは、本日の講師の竹原様をご紹介させていただきます。竹原様は、現在、「特定非営利法人まちと学校のみらい」の代表理事を務められており、教育やまちづくりに関することなど、地域や社会における様々な課題の解決と仕組みづくりを通して、すべての世代が共に協力し合える社会の実現に寄与することを目的として活動をされております。
・また、1997 年より、公募により横浜市の社会教育指導員として活動をスタート、さらには神奈川県で初となる学校運営協議会にも関わり、小中学校のキャリア教育のコーディネートなどの活動やコミュニティの核となる施設運営もされてこられました。最近では、東京学芸大学理事、県内小中学校・高校・特別支援学校学校運営協議会委員、横浜市市民協働推進委員会委員、中央教育審議会臨時委員・文部科学省コミュニティ・スクール在り

方検討会議委員などを歴任されております。
・それでは、竹原様、よろしくお願いいたします。

竹原講師

・竹原でございます。よろしくお願いいたします。
・「NPO 法人まちと学校のみらい」キックオフの基調講演をしてくださったのは慶應義塾大学 SFC の金子郁容先生で日本にコミュニティ・スクールという概念をご紹介された１人です。私たちも最初からコミュニティ・スクールについて語れたわけではなく、試行錯誤をしながらここまできましたので、本日は皆さんとともに考えていきたいと思っております。(プロジェクター、資料参照)
・今日は、「なぜ、学校と地域が連携協働するのか」「どのような仕組みで進めるのか」、そして「例えば、どんな動きがあるのか」という順に話したいと思います。コミュニティ・スクールを始める時、「何をすればいいんですか」という質問が多くありますが、どういうコンセプトするのかということが大事だと思っています。「Ｗｈｙ」学校と地域がなぜ連携協働するのか、「How」どのように実現するのかという時に、コミュニティ・スクールという仕組みと、地域学校協働活動、藤沢市では三者連携などがあります。藤沢市は市民性が高く、既にいろいろな活動があるとお聴きしています。そういうものとどうつなげ、何をするかは多彩であり、「What」はそれぞれの地域や学校によって違っていいということです。
・「なぜ」ということですが、子どもはつながりの中で育ちます。赤ちゃんが生まれ、幼稚園・保育園、小学校、中学校・・・と時間が流れていきます。空間軸としては「学校・家庭・地域・・・」の先にはグローバルな社会が待っています。時間軸と空間軸がつながり１人の子どもの成長があり、小学校３年生の先生はある部分に関わっています。中学校の先生も一部分に関わっています。商店街の方や様々な団体の方も部分で関わってくださっています。そして保護者でさえもすべてには関われていない。多彩な人が子どもに関わりながら、１人の子どもの成長を育んでいる。そして時間軸と空間軸をつなぐのは、すべての大人です。そしてその時間軸をつなぐ言葉に「小・中一貫教育」、「高・大接続」等、様々な言葉があります。そして横軸をつなぐのが「コミュニティ・スクール」です。
・このような「社会総がかりで子どもにかかわる文化」は「おらがまちの学校」ということで、東北では「おらほの学校」、沖縄では「わったー学校」、熊本では「おっどんげん学校」と言いますが、そういう言葉があるということはそのような文化があるということです。では、コミュニティ・スクールとどこが違うのかというと、「持続可能な仕組みにする」ということです。もう１つの違いは、のどかな時代の「おらがまちの学校」ではなくて、今の子どもの環境は厳しく、経済的、家庭的な課題や発達や個性の違いも見えてきました。さらに「新しい視点」として、ＧＩＧＡスクールが始まり、新しい教育課程が始まりました。このコロナ禍の中で、学校は今までなかった課題に直面しています。そういうときに

「コミュニティ・スクール」という、社会総がかりで子どもに関わる仕組みを導入することに価値があると考えています。

・これはお手元の資料としてはないのですが（映写）世の中は大きく変化しています。情報伝達の仕方として、1960 年代はハトが活躍しました。甲子園球場からどちらが勝ったか新聞社に知らせるのは 2 羽の伝書鳩でした。1980 年代になると、このように高くて重い携帯電話が登場しました。2000 年になると、ポケベルと前後してガラケーが出てきました。さらに 2020 年、ほとんどの方がスマホを持っています。お財布機能など、多機能になっています。それでは 2040 年、「人々はどんな情報伝達の仕組みを持っているか」を考えていただきたいのですが、ここで確かなことが 2 つあります。1 つは「誰も答えを知らない」ということです。教科書にも答えは載っていません。もう 1 つ確かなことは、「これをつくるのは今の子どもたちである」ということです。つまり今の子どもたちが、この 2040 年代の仕組みや機能をつくっていく。知識を総動員しながら、みんなと協力して何度も失敗してつくっていくのは今の子どもたちであるということです。

・もう 1 つ、話題提供ですが、これは 2019 年の日本財団の「国や社会に対する意識」（9 ヵ国調査）で、「自分で国や社会を変えられると思う」「社会課題について、家族や友人など周りの人と積極的に議論している」等で日本は圧倒的に低い数字です。また日本の学力は世界トップレベルだと言われていますが、「今の知識が将来の自分の人生や職業に役に立つと思うか」という問いについても低いそうです。つまり学びが社会や自分の人生とつながっていないことが課題です。そのためにはどうしたらいいかということで、新しい学習指導要領がつくられました。「今後、必要になる教育と地域の役割」として、学び続ける力を身につけることと言われ、自ら主体的に考え、自ら未来をつくっていく力こそこれからの社会で求められる力であると言われています。

・「そのために大人が連携協働してできること」として、地域の強みが発揮できます。地域にはリアルな社会があります。本物があります。いろいろな体験、様々な人との出会いができます。地域での活動では、子どもが安心して失敗し、試行錯誤することが大事だということを理解しないと大人の満足にしかなりません。「大人が用意し過ぎず、先回りせず、本物と出会えるよう子どもの本気をどう高められるか」が、私たちに問われています。もっと知りたい、またやりたい、と心に火をつけるような本気が高められるのは教科書にはない地域の力です。

・現在「第 2 ステージに入った地域と学校の関係」ということが言われています。新学習指導要領のポイントとなる「社会に開かれた教育課程」の実現に向けてコミュニティ・スクールと地域学校協働活動の一体的な推進が必要であると言われています。コミュニティ・スクールがスタートした平成 17 年から学校と地域がよい関係で連携していますという発表はありましたが、今は子どもたちのカリキュラムにどう地域が関われるかが大事になってきています。

・「Ｈｏｗ」、どんな仕組みで進めるのかというときに、「コミュニティ・スクール」と「地域

学校協働活動」があります。地域学校協働活動については各地で〇〇応援団とか〇〇ネットという名称もあり、藤沢市では「三者連携」がすでに機能し、土壌が耕されていると思います。

・「学校運営協議会」の機能として「学校運営に関する基本方針の承認をする」ということが一番大きなものです。前年度の学校関係者評価の結果をふまえ、年度初めに校長先生が、「こういう学校にしたい」、「こういう子どもを育てたい」と語り、協議後に承認をします。

・次に年度途中でも「学校運営に関して議論する」こともあります。そして「教職員の任用に関する意見を言うことができる」、という項目がありますが、これは必ずしも提出する必要はないものですが、私たちは毎年書いてきました。例えば「来年度ミドルリーダーが何人か異動の時期なので、ぜひミドルリーダーを補充してください」、「環境教育推進校として、ぜひ環境教育に関心のある先生を」と、学校マネジメント上必要な意見具申をすることができます。今までも、校長として教育委員会に意向を伝えたと思いますが、それを後押しできるのが学校運営協議会であるということです。

・「地域とともにある学校運営」のＰＤＣＡサイクルの「Ｐ」に当たる「協議」をするのは「学校運営協議会」です。「Ｄ」に当たる「アクション」ですが、学校と地域が一緒に活動する「地域学校協働活動」です。

・「Ｃ」に当たるのが「学校関係者評価」です。学校の自己評価に基づいて学校関係者が評価する。これは学校運営協議会のメンバーが行うところと、部会にしている学校もあります。以上がＰＤＣＡの中での学校運営協議会と地域学校協働活動の関係性で、全国的に両方の機能を持っているところはまだ少ない状況です。協議をしたまま、アクションにつながなければ、すべて学校の負担になります。逆に学校運営協議会がなくて、地域だけが頑張っているところは学校の運営方針とか育てたい子ども像という共通認識がないことが課題です。地域の方はスキルも高く、熱意がありますけれども、「学校教育目標」や「カリキュラム」にどう関連するかということを考える必要があります。

・大事なのは「学校運営方針を承認する」に関してですが、これは「ＯＫ」ではなく「Ｌｅｔ｀ｓ」ということです。それぞれの立場で担いましょうということで、委員は「言いっぱなし」の評論家のような存在ではなく、「私は何ができる、私たちの団体はどうする」という担い手としてアクションを考えながら発言し、参画していきます。

・「学校運営協議会のスタートに際して」委員の選定がとても大事です。当て職だったり、今までの会議の委員をそのまま横滑りにすると、何も変わらないと思っています。多彩な立場の方が参加し、「地域コーディネーター」も参加します。今までの会議では校長先生が 8 割話をし、質疑応答を少しするだけのことが多かったと思いますが、学校運営協議会は協議の場「熟議」の場です。さらに会議には管理職だけでなくて、時には教職員や生徒会委員も出席し、それぞれの思いや課題を語ることも必要だと思っています。さらに多くの当事者、保護者や教職員、地域のボランティアに熟議を拡大することもあります。

・小中一貫教育で 9 年間を見通した複数校設置も可能になり、東山田中ブロック 4 校で 1

つの学校運営協議会を設置しました。この学校運営協議会には、名司会者よりもファシリテーターが必要です。セレモニーのように会議が滞りなく終わりましたというのではなくて、そこから何か動きが出てくるものです。学校教育目標や育てたい子ども像を共有することからスタートし、「合議体」であり、「最大の応援団」であり、学校関係者評価もする「辛口の友人」クリティカルフレンドです。

・これは東山田の中学校の学校運営協議会の風景（映写）ですが、若い先生がプレゼンをしています。事務職員の方が予算の話をしたり、用務員さんがコロナ禍で子どもたちが帰った後にドアノブや便器を消毒していますという話をしてくれます。この学校はどう動いているのか、校長先生がすべてを語るのではなく、それぞれの担当者から聴くことは大事です。中学校の部活顧問は「県大会に出場できました」という話だけでなく、数学の教師であり、顧問をしている立場で思いを聞くことができます。教材研究する時間がなくて、くたくたですとか、子どもが生まれたのに、まだ自分の子をお風呂に入れたことがなくて残念ですとか、そういう発言を聞くと、保護者の方は改めて教職員への理解が深まり、「先生、朝練もしてください」とは言えなくなります。東山田中学校ブロックには各地から年間 60 回ぐらい視察がありますが、「ここまで率直な意見交換をするんですね」と言って帰られます。最初からこのようなリアルな協議ができたわけではなく、会議の在り方を工夫し進化してきました。

・学校運営協議会を設置すると議事録を作成する等事務作業が大変だと言うことがあります。2 時間の会議のテープ起こしをしている学校がありましたけれども、そんな必要は全くないと思います。協議することが大事です。（写真）この日の会議では部活の顧問が語った本音を板書し、それを写真に撮って保存しました。レジュメはホームページにアップしますが、詳細はこのように記録しています。

・「学校運営協議会で学校はもっと忙しくなる？」という質問があり、負担が増えるのではないかと考えているところが多いのですけれども、全くそうではないと私は思っています。学校は教科指導と児童生徒指導に専念でき、それ以外は保護者の責任でとか、学校と地域が一緒にやりましょうと役割が明確になり、それぞれの立場で担うことが明確になります。さらになかなかできなかった「スクラップ」ができます。何となく長年してきた活動を、何のためにしてきたのか、優先順位はどうだろうと改めて考え、あるものは当初の役目を果たしたのでやめましょうと言うことができます。スクラップした時等、「せっかく楽しみにしていた行事なのに」等のクレームが届くかもしれませんが、学校運営協議会で検討した結果です、と言えることは大きな後ろ盾になります。

・次に「地域学校協働活動」ですが、「テーマでつながる」ことが大事で、すべてをつなぐ必要はないと思っています。それから「コーディネーターがつなぐ」のですが、地域にはキーパーソンがいらっしゃいます。学校の中にも地域連携担当の先生がいるかもしれません。協働のコーディネートという発想でそれをつなぎ、どちらが上でも下でもなく、地域は下請けでも御用聞きでもありません。

・「イコールパートナー」となるための合言葉は「一緒にやってみましょう！」と言われています。お願いばかりしていると5年、10年すると「やってやったのに」と偉そうな人が多くなり、学校にとって重荷になります。藤沢市の市民活動推進センター等で先進的な活動をされていますので、藤沢では改めて申し上げることはないかと思いますが、「協働とは異なった立場の人が、同じ目的のために対等な立場で活動すること」ということを忘れず学校と地域をつなぎたいと思っています。

・それから「いざという時に」この学校と地域の関係が役立ちます。東日本大震災後、宮城県での聞き取り調査の結果では、日頃から学校と地域の関係が深いところは、避難所運営が自治的に行われたというデータがあります。さらに熊本県益城町はコミュニティ・スクールですが、地震直後、車中泊のため校庭に次々車が入りかけたところ、学校再開後の子どもたちの心身の健康を考え、思い切りかけっこをしたり、体育の授業ができるよう学校運営協議会会長と校長連名で校庭は開放をしないと決め、お願いできたそうです。一方他の学校では校庭を開放したため、最後の１台が出られた後、さらに半年間整備にかかったそうです。このようにいざというとき即決できる関係があるのも、学校運営協議会の強みだと思っています。

・コミュニティ・スクールは、様々な立場の人が当事者になるということです。校長先生の学校運営をバックアップできる。問題が起きたとき、臨時の学校運営協議会が開かれたこともあります。常に学校は○か×ではない難しい判断をするなか、判断の後ろ盾になれます。生徒数が減って部活を１つ減らさなければいけない時、学校運営協議会で検討した結果「こうしました」というと、校長先生はとても楽になるとおっしゃいます。

・学習面では、地域の方から学んだり、地域に出て活動し、リアルな学びにより教育内容が充実し、「社会に開かれた教育課程」の実現につながります。学校という場所は、全国どこにもある公共施設です。まちづくりの核でもあり、「いざという時に頼りになる信頼関係」が子どもを中心にでき、地域の企業や人や組織がつながります。コミュニティ・スクールは、看板をかけたから、制度を入れたからといっても直ぐには変わらない、漢方薬のようなもので、じわじわと体質改善をします。さらに 10 年、15 年たつと、マンネリ化しがちで、糠床のように常にかき回しておく必要もあります。

・最後に「What」として「多彩な活動」が展開されますが、どのまちにも「たからはいっぱい」あります。藤沢市のそれぞれの地域に特色ある「まちのたから」があります。

・この地図は、東山田中学校ブロックにある文化、農業、自然、産業、歴史や団体活動や人の「まちののたから」があることを表し、このような地域で子どもたちは多くの出会いや学びをしています。

・全国の校長先生の９割以上が、「既に学校と地域は連携し良い関係をつくっている」と答えると言われています。１年に１回、敬老の集いで合唱を披露しています、凧揚げ大会していますということから、学校マネジメントにかかわり、カリキュラムを一緒に考えていることまで、ステージは違います。この地図を見ているだけでは「すでに、やっています」

という話になりますが、裏側には同じものを時間軸に落とし込んでいます。小学校１年生から中学３年生まで、各教科のカリキュラムとして可視化しており、今後の動きにつながります。この表は各地でご紹介し広がり、文部科学省の「社会に開かれた教育課程」の説明資料としても使われています。

・かつて訪れた上越市の小学校には廊下にカリキュラム表が貼ってありました。保護者・地域の方もカリキュラムに関心を持ち、さらに春日小学校では学校運営協議会でカリキュラム内容についての議論もしていました。

・最後にこの写真には「子どものみらいのために」と「まちのみらいのために」とありますが、横浜市都筑区のある地域の川の風景です。そこにはかつて粗大ごみが捨てられ子どもに見せたくない光景が広がっていたそうです。学校運営協議会で議論し、まず、区役所に電話してトラックを出してもらいゴミの撤去ができました。けれどもそのままにしておくと、また誰かがごみを捨てるだろうということで、桜の名所だった川沿いにチューリップを植えることにしました。いつ植えるのか、誰がお金を出すのか、誰が作業をするのか等いろいろな話し合いをしました。話し合いの結果 11 月に小学校５年生が地域の方たちと一緒に球根を植えます。そして４月、サクラの季節に６年生になった子どもたちはこの美しい風景を写生して卒業していきます。1999 年には旧建設省建設大臣から「手作り郷土（ふるさと）賞」を受けました。

地域の課題をみんなで解決し、子どもの学びと共にまちづくりにつなげたエピソードとして私はこの写真がとても好きです。ある時この地域の長老に、「この写真、使わせていただいてます」と言ったところ、「チューリップに決めたの俺だよ」とおっしゃいました。半年後に、小学校の校長先生にお会いしたときも、また、この写真の話が出て、「素晴らしいですね、この風景いいですね」と話をしたところ、「チューリップに決めたのは子どもたちです」とおっしゃっていました。みんな自分事なのです。様々な人が子どもの未来のために関わり、まちの次世代の担い手を育てていく。コミュニティ・スクールとは、息の長いものだと思っています。この藤沢市でも本物の素晴らしいコミュニティ・スクールをつくっていただければと思っております。

（拍手）

鈴木市長

・先生、どうもありがとうございました。大変わかりやすいお話で、とても参考になりました。藤沢市もコミュニティ・スクールはそれぞれの学校で、地域の中にあるものとうまくほど良い関係をつくっていく、その参考になればと感じております。藤沢も市民活動が大変盛んで、地域力や市民力など、非常に意識が高い地域ではないかと思っています。

・コロナ禍においても、助け合い活動などが地域の中で行われておりますし、休校の際の子どもの居場所などについても、子ども青少年部や教育委員会、青少年指導員さんや地域の皆様などと学校とで連携し、児童の見守りなどを行っていただきました。また、ひとり親

家庭や就学援助制度の対象で、生活に困っているなどの理由で支援が必要な家庭に対しては、学校の調理員さんによる軽食の配付も行い、また、コミュニティソーシャルワーカーが昼食を自宅に届ける際には、一緒に困りごとの解決や制度の案内なども行いました。

・藤沢ではそういったそれぞれの力によるマルチなパートナーシップで課題を解決しようということで、企業やいろいろな団体と連携し、課題解決を目指して取り組んでおります。

・いろいろな方々がいろいろな課題に向かって進んでいき、コミュニティ・スクールを目指しておりますし、コミュニティ・スクールの目指す姿を学校、地域の中で考えながらやっていくことが理想の姿ではないかと思っています。いずれにしても竹原先生のお話を聞いて、大変参考になったと思います。

・それでは、皆さんの方でご質問等がありましたらお願いします。

木原委員

・お話、ありがとうございました。それぞれの立場やそれぞれ地域で、例えば町内会などで今までやってきたという自負のある方たちがいらっしゃると思うのですが、そういった中で、これはカリキュラムから考えると大変だったなと気づくにいたるまでの、嫌な気持ちになったりとか本来の問題点とか何かそういったことがあって、それを超えてこういう形になっているのかなと感じたのですが、そういう事例などがあったら教えていただけたらと思います。

竹原講師

・どの地域にも情熱的で、善意あふれ様々な経験をお持ちの方が多くいらっしゃいます。そういう方と学校がパートナーとなるためには、それぞれの地域で育てたい子ども像や学校目標を考える必要があります。おいしいから、栄養があるからといってすべて食べればメタボになってしまうように、学校も健康体であるためには何を地域とともに実施するか検討が必要です。

・学校と地域で「現状を可視化」して考え、カリキュラムをものさしに検討することを重ねると、学校と地域が一緒にすること、地域がすることが明確になります。

飯盛委員

・すばらしいお話ありがとうございました。資料の最後のページにありますように「子どものみらいのために」と「まちのみらいのために」という両方を生かす制度だと実感をいたしました。あともう一つ、今注目されているのが、共創、いわゆる「コ・クリエーション」ということで、主体性を持っていくことが求められますが、コミュニティ・スクールはそういったところにも役に立つ取組なのかなと感じました。また、大人が用意し過ぎないというところについて、未完成な場づくりとよく言われますが、そうしないと他人事になっ

てしまうので、大変よかったと思います。ありがとうございました。

・そこで、２つほど質問をさせていただきます。１つは、地域コーディネーターの方が極めて大切な役割を果たしておりますが、こういった地域コーディネーターは、どういったご苦労をされているのか。また、その地域コーディネーターにはどういった方がなっているのかということと、もう１つは学校の先生方は異動がありますので、そういった分野での取組、特に地域づくりに関しては時間がかかる分野なので、先生方の異動がある中で、持続性をどうやって担保するかというところをお伺いできればと思います。

竹原講師

・ありがとうございます。共創ということは、むしろ飯盛先生から学ばせていただきたいと思います。今までは行政や学校に物を申す。そうした消費者のような保護者が多かったかもしれませんが、みんなで育てるという大きな価値の転換だと思っていますので、そういう環境づくりが徐々にできればいいと思っています。まさにコーディネーターが大事です。全国調査によると、コーディネーターはＰＴＡ活動をしていた人、ボランティア団体や地域・地縁組織のリーダー中で「協働」を良く理解している人が多く活動しています。トップダウンの方ではなく、一緒に考えて共に汗を流す、そういうコーディネーターがいいと思っています。時に「うちのまちにはいません」という声がありますが、必ずいらっしゃいます。自ら手をあげる方はいませんが、地域を良く知っているキーパーソンとつながり、そこからお願いすることができます。

・コーディネーターの苦労ということですが、研修が大事です。１人に頼らず異なったアンテナやネットワークを持ったコーディネーターズをつくり、課題や情報を共有することが大事だと言われています。

・それから地域は継続性が高く、10 年、20 年とかかわりますが、先生は異動があります。時に校長が代わり急に「〇〇教育をすすめます」と言われることもありましたが、学校運営協議会があることで一貫した教育が行われ継続性が高まります。

・東山田中学校では例年４月３日午前中１時間、「地域と学校の連携について」新任教職員研修をしています。この学校はこうやって地域とともに歩んできたということを最初に伝え、継続できるようにしてきました。

大津委員

・どうもありがとうございました。ちょっと確認をさせていただきたいのですが、今のお話の地域コーディネーターを含めた人材は大変重要だと思うのですが、「学校運営に関する基本方針」というのがありますが、人材を集めるに当たって、その基本方針が大変重要になるのではないかという感じがするのですが、一般的に人材ありきなのか、方針が先で、ある程度ビジョン的なものがつくられて、それに沿った人材を集めていく、そういうこと

が大切になるのか、その辺は具体的にどういった感じになるのか、教えていただければと思います。

竹原講師

・まず学校運営協議会の委員や地域コーディエ―タ―の選定が要です。その前提としてどういう子どもに育てたいか、何を重点化して教育したいかを明確に基本方針をしっかり作ることが大事です。特に特別支援学校、商業高校・工業高校等特色のある学校では、地域コミュニティの方と共にテーマコミュニティにかかわる専門家等が委員になります。私はあおば支援学校の学校運営協議会の立ち上げにかかわりましたが、多彩な委員が参画される重要性を痛感しています。

岩本教育長

・本日は貴重なお話をいただきまして、ありがとうございました。これまで頭の中でぼやっとしていた部分が、先生のお話をお伺いして、すっきりとした部分がたくさんあったなと感じております。
・ちょっと質問をさせていただきたいのですが、藤沢市の場合、これから多くの学校にコミュニティ・スクールを広げていくというところですけれども、先生はこれまでに多くの学校に携われて、うまくいった学校と、なかなかこれはというふうな学校がおありになると思いますけれども、これから広げていくに当たって下地と言いますか、こういった地域、またこういった学校がうまくいくよと、また、こういったところはなかなかうまく運ばないので、我々としては導入する前に下地づくりということも考えなければいけないかと思っていますので、その辺のところで、アドバイスをいただければありがたいので、お願いします。

竹原講師

・私たちのところも試行錯誤でした。管理職だけが会議にかかわるのではなく、若い先生や事務職員の話も聞いてみることにして初めて議論が深まりました。そしてセレモニーのような会議をするのではなく、本気で学校と地域が協議することが必要です。
・市長、教育長がコミュニティ・スクールについて語っていただいているところはうまくいっています。中教審の教育委員会制度検討にかかわり、教育長研修もさせていただいたことがありますが、教育長が本気で思っていらっしゃるか、担当者だけに任せているかによって大きな違いがあります。そのような意味で、藤沢市はうまくいくのではないかと思います。
・また地域の方、一般の先生方の研修、さらに学校と地域の合同研修が推進力になります。まずコミュニティ・スクールについて自分の言葉で語れる校長先生がいて職員室の中で

理解が進まないと、管理職だけが悪戦苦闘するか、形式的に実施することになってしまうので、研修が大事です。

鈴木市長

・それでは、一回りしましたが、コミュニティ・スクールについて共通認識が持てたと思います。そこで今度は、藤沢市においては２校をモデル校にして行っておりますので、その状況について教育委員会の説明をお願いします。

教育部長

(資料「モデル校における学校運営協議会の取組状況等について」参照)

・本年度より全校実施に向けてスタートを切ったところですけれども、学校運営協議会の全校への設置を進めるに当たりまして、コミュニティ・スクールの意義とか設置効果などを踏まえた上で、本市の学校教育の理念とも照らした上で、藤沢市が目指すものがイメージしやすいようにというところで、スローガンなるものを定めてスタートをしています。

・モデル校につきましては、北部地域と南部地域に位置する「秋葉台小学校」と「片瀬小学校」の２校をモデル校に位置づけて、スタートを切ったところです。モデル校におきましては、委員の人選については、表に記載していますが、それぞれの学校で課題ととらえている部分もございましたので、そのあたりをうまくコミュニティ・スクールを活用しながら取り組んでいきたいという思いもありましたので、その点を踏まえて、学校運営協議会委員の選出をしていくことといたしまして、選出に当たっては、学校長の意向も踏まえた上で、学校長、教育委員会、市民センター・公民館、そして三者連携の役員等で協議をいたしまして、それぞれの学校の委員の人選を行っております。

・今年度の学校運営協議会につきましては、年間５回を予定しておりまして、ここまで、記載している内容で２回ほど開催してきております。各校とも第２回目の協議会の中では、学校の抱えている課題やニーズといったものに対して、地域からも具体的な支援の提案などもされていると聞いております。

・今後の取組・進め方についてですけれども、モデル校の実施状況を踏まえ、今後のかじ取りを行う組織として、校長会の代表、教員の代表、モデル校の校長、そしてモデル校が関係している市民センター長、さらには教育委員会教育部・関係課で構成している「学校運営協議会検討会議」を設置しておりまして、その検討会議については、モデル校における学校運営協議会の開催前後に開催するように位置づけておりまして、モデル校での取組を共有しながら、設置校をこの後どうやって拡大していこうかというような方法についての検討ですとか、また、関係者の意識啓発といった部分をどのように進めていくかというようなところを協議しているところです。

・さらに次年度は、今、２校で進めているモデル校の部分をどういうふうに広げていくかと

いうところの検討に入っているところですけれども、次回の検討会議の中ではその方向性の一定の整理をつけて、次年度に向けて、さらに進めていきたいと取り組んでいる状況でございます。説明は以上です。

鈴木市長

・今、藤沢市のモデル校における取組を説明していただきました。この点についてご質問等ありますか。

大津委員

・少し確認させていただきたいのですが、モデル校の２つを見てみると、先ほど先生にビジョンに基づいて人選をしていくという形を確認させていただいたのですけれども、似通った人選になっているかなと思うのですが、藤沢市の場合、委員さんの人選をどんなふうに考えているのか、教えていただきたいと思います。

教育総務課

・それぞれ委員の人選が似通っているというご意見をいただきました。秋葉台小学校は北部の地域で、主に外国籍のお子さんが多いという課題があって、そういったお子さんに対してどういった支援ができるかということを、大きな課題として受け止める中で、資料に記載しているように、民生委員さんや主任児童委員さん、また、社協の CSW の方、大学准教授とあるのは慶応大学の先生ですが、慶応大学のそばの「子ども食堂」にも関わりを持っておられまして、そういった方々に委員に入っていただいて、現状の福祉的な課題解決に資するような議論を進めていけたらいいのではないかということで、この人選をしております。

・一方、片瀬小学校ですが、片瀬という地域は、元々、地域力が非常に高いところがありまして、この地域力の高さを、学校運営協議会の中に落とし込めれば、学校と地域との連携を強めていけるのではないか、ということを校長先生がお考えになられていましたので、前学校評議員の皆さんに加えて、市民センター長や職員、こちらは公民館担当の職員になりますが、日ごろから地域に関わられている方々に入っていただき、どのように地域との連携力を強めていくかということで、それぞれ人選をした結果が、このようになっているところです。片瀬小学校については、規則上、15 人以内というところを今回、少な目に設定しておりますが、これは、まだ始まったばかりで、先が見えない部分もあるので、今後、こういった委員さんに入っていただこうという議論になれば、随時追加をしていくような形で、まずはちょっと少ないところから始めたという経緯がございます。そして両校に共通して言えるのが、地域で学校支援の取り組みをしていただいている三者連携の会長さんや、ＰＴＡ、これは保護者の枠になりますけれども、こうした方々は法で定められ

た枠により選出したメンバーとなりますので、一見似通った人選になってしまっているかもしれないのですが、学校の課題を踏まえて、それぞれ個別に委員の人選を行っております。

大津委員

・経過については今の説明でわかりましたが、ビジョンに合わせて人選をしていくという形で受け止めさせていただきますが、特に学校連携ということになりますので、子どもたちのことをよく考えた人選なり、テーマの設定も含めて、まだそこは検討の余地があるのであれば、お願いしたいと思います。

竹原講師

・補足させていただいてよろしいでしょうか。それぞれの学校の課題に着目しながら、人選をしていくというのはとても大事だと思っています。ご説明があったように、途中から入っていただける可能性を残すことも大事です。ＮＰＯ活動をされている方、大学教員、弁護士、企業人や企業の方等、様々な視点を持つ委員によって今までとは違った議論ができるよう人選をする視点が必要になります。

鈴木市長

・オブザーバーとして参加してもらったりすることは可能だと思うので、いろいろ柔軟に必要なものに対処できるようにやっていただきたいと思います。

飯盛委員

・ご説明ありがとうございました。今のお話にも少しありましたが、まさに始まったところで、これからなんでしょうが、これが子どもたちの学びとか授業につながっていくのは、いつごろからという予定のようなものはあるのでしょうか。既にやっているとか、子どもたちの関わりについて教えていただければと思います。

教育総務課

・モデル校において、具体的にカリキュラムに直結しているということはないのですが、これがカリキュラムに直結と言えるかどうかは分かりませんが、１人１台端末が始まり、子どもたちに端末が配られて、まずログインをしないといけない。そうすると、例えば小学校１年生の子がログインをするときに、平仮名すらままならない子が、アルファベットでログインしなければいけないといったときに、１時間の授業の中で実際にログインに成功した子が５、６人といった状況で、１人の先生で対応するのはなかなか難しいというこ

とが、学校運営協議会の議題として出ました。そうであれば、パソコンの専門家でないにしても、子どもたちに寄り添って、サポートしてくれる地域の方々がいらっしゃると、授業の進みに良い影響が出せるのでは、といった話し合いがなされており、今後、恐らく具体的に課題解決の取組が進んでいくのではないかと思います。先ほど竹原先生からお示しいただいたような、通年を通してカリキュラム活動を可視化して、ポストイットを貼りながら、「これ、要るよね、要らないよね」みたいな、そこまでの議論ができるような学校運営協議会になるには、まだまだ検証が必要ですけれども、我々としては竹原先生からお話しいただいたスタイルを１つの目標として掲げながらやっていけたらいいなと、つくづく感じたところでございます。

鈴木市長

・他にはよろしいですか。なければ、最後に、教育長の方からご意見がありますか。

岩本教育長

・本日は竹原先生には貴重なお話をいただきまして、ありがとうございました。

・最後に、私の方でお話をさせていただきます。先ほども説明させていただきましたように、今年度、藤沢市ではコミュニティ・スクールの取組の第１歩として、小学校２校をパイロット校にしてスタートいたしました。経験豊富なバイタリティのある２名の校長先生に託しまして、今後の藤沢市の取組をリードする２校として、大きな期待を持って見守っているところでございます。これまでのところ着々と取組を進めていただいているというふうに感じております。今後、このように市内全体に広げていくことができるか、そういったことが大きな目標と思っております。

・学校にとって保護者はもちろんのこと、地域との信頼関係は大切であるということは、すべての学校の校長先生が認識し、日々取り組んでいるところでございます。ただ、これまでその取り組みにつきましては、各学校の校長先生に任されている部分がありまして、多くの学校はそれぞれの思いの中で個性を生かしながら取り組み、地域との関係を築いてきました。

・一方で、余りそういったことが得意でないというか、消極的な校長もおりましたので、地域からの評価も様々な部分があるというのが現状であると思います。また、地域の方から見た学校につきましては、我が子が通う小学校の６年間、中学校の３年間、これに限られた関係というふうにとらえている場合が多いようにも感じます。例えば熱心にＰＴＡ活動を担っていただいた方が、上の子のときから下の子までずっとＰＴＡ活動をしたけれども、この子の卒業で学校との縁が切れてしまうのが残念ですというようなことを言われる方がよくありました。そんなときにはこれからも地域の支援者として学校にぜひ携わってくださいと言ったものです。

・学校は学校教育にとどまらず、地域の教育の拠点として市民センターや公民館とも連携をしながら、生涯にわたり学び続ける人たちのために、その役割を果たすことが必要であると考えています。また、地域の方々にそのように認識していただけるように努力することが必要であると考えています。

・地域の活力というのは、例えば自治会の活動であったり、地域防災の活動であったり、老人会、子ども会、そういったことに率先して携わってくれる地域の世話役の方によって支えられているのかなと思います。次代を担う人材は地域の学校で教育を受け、そして地域で生活をして地元を愛する心を養い、地域活動や地域の方との関わりの中で生きる力が育まれていくと思います。

・学校は将来の地域を担う人材を育成する場ととらえていただければ、地域の方々の関心は自ずと高まると思っています。また、地域で子どもたちを熱心に支え、活動されている方々と接するときに、その多くの方がずっと以前に、お子さんが地域の学校に在学中、そこでＰＴＡ役員とか熱心に活動された方が非常に多いなと感じます。そしてそのときの人脈で今もつながっているということに気づきます。学校は子どもだけではなくて、保護者の大人のつながりにも一翼を担っているなというようなことを感じるところでございます。学校にとって教育活動の中で、地域の方々の力を活用できることは、子どもたちの学びにとって本当に大きな力になります。授業に地域の力を取り込む、また、その地域ならではの特徴を生かした授業をするという場合には、地域の方々の支援や協力は欠かせません。また、教員の多忙化の解消にもご協力をいただいております。一例を挙げますと、現在も登下校の見守りとか、放課後のパトロール活動であったりと、大変助けていただいております。現在、子どもたちは多くの課題を抱えておりまして、その課題は多様化・複雑化しております。例えば貧困の問題、虐待の問題、ヤングケアラーの問題など、学校がいわゆるプラットホームとして発見するところまではできても、その先まで立ち入ることができないなんていう場面もございます。その解決には当然、地域や行政との連携が不可欠になると思います。

・これまでも三者連携の取組、また学校の委員会による内部評価などで地域と協力し、地域の意見を取り入れる機会は数多くありました。そういった今回のコミュニティ・スクールの取組にも、これまで積み上げてきた「藤沢の強み」を生かせればと思っております。校長は地域の要望や委員の方からの意見を踏まえて、学校運営の基本方針を作成し、学校運営協議会で承認されることにより、学校は自信を持って学校運営に取り組むことができますとともに、学校にとっては地域の中に学校の理解者を増やすことにつながるのではないかと思います。

・また、地域にとっては、親はまちの学校に関心が高まり、意見も言いやすくなる、こういうふうに民・民の関係が築けるようなコミュニティ・スクールにしていきたいと考えております。今後、子どもたち、保護者、地域、そして学校の先生たちの笑顔があふれる学校を目指して取り組んでまいりたいと思います。本日はどうもありがとうございます。

鈴木市長

・時間も参りましたので、今日はこれで終わりにしたいと思いますが、先生、本当にありがとうございました。また、今、市からのモデル校の話も聞きましたけれども、約半年過ぎまして、ここが正念場だと思っております。この２校の取組は、それぞれ地域の特色を生かした人選も行われているようなので、ぜひこれから他の学校区にも広まるように頑張っていただければと思います。少子・高齢化であったり、コロナ禍であったり、また、人間関係の希薄化というのもありますけれども、社会の状況がいろいろ変わってくる中において、地域と学校がとかく疎遠になりがちですけれども、これが近くなって、そしてまた１つの課題に対して一体的に取り組めるということは、それぞれにとってより良い関係ができてくるのではないかと思っておりますので、ぜひ強力に進めていただきたいと思っております。今日はどうもありがとうございました。

・それでは、議題（１）については、ここまでといたしまして、竹原様には貴重なお話とご意見をいただき、改めて御礼申し上げます。ありがとうございます。

鈴木市長

・次に、議事（２）その他について、事務局からお願いいたします。

事務局

・事務局からは議事としては特にございませんが、総合教育会議の日程での事務連絡をさせていただきます。次回、第２回につきましては、新型コロナウイルス感染症の状況にもよりますが、現在のところ２月 10 日（木）を予定しております。議題等につきましては、これから教育部と改めて調整をさせていただきますが、テーマとして何か取り上げたいものなどございましたら、事務局の方へご提案いただければと思います。

鈴木市長

・ただいま事務局から日程の説明がございました。他に委員の皆様から何かございますか。特にないようですので、事務局の方にお返しをしたいと思います。

事務局（司会）

・本日、ご講演いただきました竹原様、ありがとうございました。そして教育委員会委員の皆様、ありがとうございました。

・以上をもちまして、令和３年度第１回総合教育会議を閉会といたします。

午後３時４０分　　閉会

2021 年（令和３年）11 月 1 日

この会議の経過を記載し相違ないことを確認する。

藤 沢 市 長　　鈴木順夫　印

藤 沢 市 教 育 長　　岩本将宏　印